

文 化

や非営利組織(NPO)で活躍する女性、農家のお嫁さん、ふだんエッセイなど書くことのない人たちが。

すうーっと並ぶ雑誌は、わたしのとろろぐらいになつた。

初めから、文壇や雑誌にあこがれていたわけで、はまったくない。小学4

年で読書をはじめ、20代の中ころまでは活字に縁のない生活を送っていた。母がじくになり、病気が

た結核相手だった。大の上野のぼろぼろの三州義塾という硬派の書局を興行していた。昔の自由民権運動の

たからだ。「これからは味かわいてきた。『三州義塾』を『鹿島』に転道修正したのは、男性に読者を絞った作り方に限界を覚えたからだ。『これからは

編者、記者が珍しくて、それを助かったこともある。創刊4号で当時の南日本放送会長の島中幸雄

さんを取材したときのこの。米国で海軍提督の称号を贈られた時で盛り上がったいたら、秘書が山田先生がお見えてです」と入ってきた。

大を主眼に広告事業、鹿島でもかつて、文章を売り物にする雑誌が次々に生まれた。「随筆かごしま」を創刊する前には、文芸誌、論壇誌

など多様な雑誌がひしひしとあつたが、その後、活字離れと相次ぐ経済不況でどんどん仲間が脱落していった。今でも写真が

メインの情報誌やタウン誌はあるけれど、文字が

ら、広告費などで他人の腕を下げるのは大の苦手。いっばつ、わたしは「走れ！」と三つわれば

る。理由も聞かずに突進する「おてんば」だった。「ゴイツは役に立つ」とムコ殿は見込んだのか

もしれない。引年の結婚後後から、

女性に読者を絞ったのは、男性に読者を絞った作り方に限界を覚えたからだ。『これからは

編者、記者が珍しくて、それを助かったこともある。創刊4号で当時の南日本放送会長の島中幸雄

鹿島島の雑誌細腕で守る

◎女性意識と文芸主体で誌面作り、活字離れにも負けず

上 園 登 志 子



「随筆かごしま」を手にする読者

ら、広告費などで他人の腕を下げるのは大の苦手。いっばつ、わたしは「走れ！」と三つわれば

る。理由も聞かずに突進する「おてんば」だった。「ゴイツは役に立つ」とムコ殿は見込んだのか

もしれない。引年の結婚後後から、

女性に読者を絞ったのは、男性に読者を絞った作り方に限界を覚えたからだ。『これからは

編者、記者が珍しくて、それを助かったこともある。創刊4号で当時の南日本放送会長の島中幸雄

さんを取材したときのこの。米国で海軍提督の称号を贈られた時で盛り上がったいたら、秘書が山田先生がお見えてです」と入ってきた。

いっばつ、女性が自分の意見を公にすることにへの抵抗はまだあった。やわらかい誌面づくりを指して女性にも寄稿してもらおうと声をかけた

が「女が文章を書くなんて」と、二の足を踏まれることもあった。山のような信念を語

ら、広告費などで他人の腕を下げるのは大の苦手。いっばつ、わたしは「走れ！」と三つわれば

る。理由も聞かずに突進する「おてんば」だった。「ゴイツは役に立つ」とムコ殿は見込んだのか

原稿執筆のお願いをすると、おは、よくこんなやりとりをする。1977年(昭和52年)に創刊した「随筆かごしま」はエッセイとインタビューが主体の雑誌。地元鹿島島の作家に原稿を頼むこともあつたけれど、筆者の多くは中小企業の社長さん

「随筆かごしま」を手にする読者

「随筆かごしま」を手にする読者

ら、広告費などで他人の腕を下げるのは大の苦手。いっばつ、わたしは「走れ！」と三つわれば

る。理由も聞かずに突進する「おてんば」だった。「ゴイツは役に立つ」とムコ殿は見込んだのか

もしれない。引年の結婚後後から、

女性に読者を絞ったのは、男性に読者を絞った作り方に限界を覚えたからだ。『これからは

編者、記者が珍しくて、それを助かったこともある。創刊4号で当時の南日本放送会長の島中幸雄

さんを取材したときのこの。米国で海軍提督の称号を贈られた時で盛り上がったいたら、秘書が山田先生がお見えてです」と入ってきた。